

愛しき

日本



「歌」について書く。日本

る。

の大衆歌謡、いわゆる演歌がいまや絶滅寸前の状況である。何を大げさな、と思われそうだが、世代を超えて歌われ、次の時代にまで残りそうな歌謡曲がなかなか生まれな

い。曲も生まれにくい、音楽ビジネスとしても、もはやじり貧と言ってもいいところまで来ている。何とかしなくてはいけない、と思い、筆者はたった一人で動き始めることにした。全国にいろであらう

伝わる歌を歌える歌手を一堂に集め、B級グルメからタイトルを拝借し「全日本B級歌謡選手権大会」を開催しようといま各方面に働きかけてい

る。比較的若い演歌歌手でも聴きに来るのは高年齢層が圧倒的に多い。

隣の韓国では「トロット」と呼ばれる演歌は世代を超えて強い人気がある。コンサートも各世代の客がそろっている。日本の大衆歌謡にはい

危機の「演歌」

り歌は「歌う」ものになっ

た。だれもがから道ならぬ恋に思いをさせるといふような不倫の歌が好まれる。この手の歌は内容からして家族の前ではなかなか歌いにくい。

昔の歌には、愛も恋も無縁の歌がたくさんあった。三橋美智也「古城」、春日八郎「山の吊り橋」、美空ひばり「柔」、島倉千代子「かるかやの丘」などたくさんある。いまはそ

き、身体が震えるような思いがすれば、メロディーは不思議なほど自然に湧いて来る。そういう歌はほとんどヒットする」。

時代を引き継ぐ歌を

ゆるスタンダードと呼ばれるようなものがない。たとえば「みだれ髪」は美空ひばりの歌であり、だれもが歌うスタンダードと言いき難い。これ

はたぶん、レコード会社が絶大な力を持っていた一昔前の時代のなごりだと思いが、体

歌手の時代になったのである。人々は自分が歌いたいと思つ歌を探し求める。制作する側もカラオケで歌ってもらえる歌を作る。歌って気持ちのいい歌、男性であれば少し

お酒が入ったところで歌う歌は、湯の宿で雨の音を聴きな

れを探し出すのが難しいほどである。たぐさんの力のある作詞家が世を去ったことも大きい。星野哲郎、石本美由起、吉岡治、阿久悠……。ある著名な作曲家はこう打ち明けた。

「曲の善しあしは6割方、詩で決まる。詩を受け取ったと

た。これはどこの国でも同じだと思われるでしょうが、実はこれほど顕著なのは日本だけである。日本で演歌歌手の

コンサートへ行くと、来ている客は60代以上がほとんどであ

た。このころは作詞、作曲、歌唱を一人でしたりするケースが多いし、詩よりも曲が先にできることも多い。NHKの紅白歌合戦の出場者を見て、男女とも演歌の歌手は4、5人と激減している。50年以上の歌手も珍しくなく、若手といつてもデビュー20年だったりする。いかに歌がうまくともせまい大衆歌謡のマーケットに入り込むのは至難の業である。全国的な知名度はな

くとも、すごい実力の歌手は全国にたくさんいる。こういう人を集めて大会をする。歌の本当のすばらしさを知ってもらう、それだけが目標だ。

(政治ジャーナリスト、四国新聞特別コラムニスト)